Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-07

『山月記』李徴の七言律詩に答詩する

岡本, 利昭

(Citation)
研究紀要 : 神戸大学附属中等 論集,6:15-20

(Issue Date)
2022-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81013135

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013135

実践報告

『山月記』李徴の七言律詩に答詩する

Answering “Sangetsuki” Li Cho's Seven words Poem

岡本　利昭
OKAMOTO Toshiaki

中島敦の小説「山月記」には主人公である李徴の七言律詩が効果的に使われているが，本来であれば，友人同士では，詩は相互に贈答を行うことが普通である．「山月記」を読み終えたあとの表現活動として，友人の袁傪の立場になって，李徴に送別の詩を返すという実践を行った．

Atsushi Nakajima's novel "Sangetsuki" effectively uses Li Cho's seven-words poem, but it is normal for friends to give poems to each other. As an expression activity after reading "Sangetsuki", I took the position of friend En San and practiced returning a farewell poem to Li Cho.

キーワード：　七言絶句，贈答詩，押韻
Key words: seven words poem, gift poem ， rhyme

I　はじめに

中島敦「山月記」は高等学校国語教材の定番と言ってよい教材であり，現在までに，先賢によって様々な実践が行われている．単元を終える際の表現活動でも，様々な活動が今まで試みられてきている．実践史を繙いてみても，増淵恒吉は，作品テーマについて学習者に発表させているし，分銅惇作は，作品主題をレポートにまとめる，日比慶子は，李徴への手紙を書かせるなど、様々な活動が見て取れる．またこれ以外にも優れた実践者によって意欲的な表現活動が行われているものと思う．

さて,中島敦の多くの作品に共通することであるが, 中島作品には,中国古典に取材したものが多い.「山月記」の場合も例外ではなく『人虎伝』に取材し，換骨奪胎がなされている．ただ，「山月記」中で李徴が袁傪に送る詩（七言律詩）は『人虎伝』所収になるものが，そのまま使われており，李徴が袁傪に自己の不運を吐露する際の非常に効果的な演出の道具となっている．

これは一旦，作品の表現効果であるということを離れて考えてみると，李徴から袁傪への贈答詩（贈詩）と考えられないこともない．本実践では，まとめの表現活動として，「山月記」を読み終えた生徒が，袁傪の立場に立ち，李徴に対して答詩を作る活動を行った．その報告を行いたい．

II　詩の贈答をする

普通，詩を贈られれば，贈られた詩に答詩することが考えられる．特に，別れに際して，詩人同士，文人同士で，詩を贈りあわないことは考えづらい．高校教科書によく掲載される夏目漱石と正岡子規、李白と杜甫などは好例である．「山月記」では李徴、袁傪ともに非常な秀才として描かれているが，袁傪が旧友の李徴から詩を贈られ答詩していないのは，士大夫としては考えてみれば異例である．そこで，まとめの活動として，袁傪の立場に立って李徴への答詩を作ることにした．生徒

は附属中等教育学校５年生（高校二年に相当）109 名であり，作詩法を約二時間で速習してから，作詩することにした．この年は幸いにも５年生の現代文Ｂとともに古典Ｂも授業を担当することができたため，「山月記」の学習と並行して古典Ｂの時間に学習していた『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』では贈答歌を取り上げ，贈答に関して，和歌と漢詩との共通点と違いとを意識させるようにした．日本古文の場合は，贈答歌の例を学習することは多いが，詩の場合は贈答詩を学ぶことは少ないという問題意識が以前からあったからである．

II　和歌と詩における贈答（贈答歌・詩）

一般に贈答歌は，二人の間で取り交わされる和歌であり，男女の恋愛において交わされることが多い．大抵は恋人や夫婦の間で交わされたが，時には君臣，親子，兄弟（姉妹），知人の間で交わされる場合もある．『紫式部日記』には，藤原道長が紫式部に読みかける有名な場面がある．

> 『源氏の物語』，御前にあるを，殿の御覧じて，例のすずろ言ども出で来たるついでに梅の下に敷かれたる紙に書かせたまへる．
>
> すきものと　名にしたてれば　見る人の
> 折らで過ぐるは　あらじとぞ思ふ
>
> たまはせたれば，
>
> 人にまだ　折られぬものを　たれかこの
> すきものぞとは　口ならしけむ
>
> めざましうと聞こゆ．（『紫式部日記』寛弘五年）

この場合，道長が歌に詠んだ，「すきもの」「名にし立つ」「折る」を，紫式部は見事に「折られぬ」「すきものぞとは」「口ならしけむ」と返歌に読み込んで贈答歌として仕立てている．

大学入試でも贈答歌が問題文中に含まれることも多いため，生徒も和歌での贈答については，そのしきたりを理解している．だが，漢詩の贈答の際の「しきたり」には，理解が進んでいない．和歌での贈答を学習した後，ためしに「漢詩の贈答の際には，どのようなしきたり（方式）に従って詩を返すのか」を生徒に聞いてみても，即答する場合はまれである．

ただ，「漢詩の詩としての特徴に留意して想像してごらん」と発問すると，多くの生徒から「韻に工夫をする」という答えを得ることは出来る．

漢詩には「和韻」というきまりがあり，贈られた詩に使われているのと同じ字，もしくは同じ韻目で返すことが求められる．つまり，詩の贈答を行った場合，贈られた詩の韻目や韻字に注目して（もちろん内容にもだが）詩を返すことになる．

簡単にまとめると，和韻には，「依韻」「次韻」「用韻」の三種類がある．まず，①贈られた詩と同じ韻目の文字を使うが，贈られた詩と「同じ字」を使わない依韻．次に，②贈られた詩と「同じ字」（韻字）を贈られた詩の順序通りに用いなければならない次韻．さらに，③贈られた詩と「同じ字」（韻字）を用いるが，贈られた詩に順序通りに用いなくてもよい用韻である．表にすると，次のようになる．

表１　和韻の別

	同じ韻目	同じ字	同じ順
次韻	○	○	○
用韻	○	○	×
依韻	○	×	×

注：○の印は，用いること，×は用いないことを表している．

ただ，次にあげるように，盛唐期にはいまだ，和韻は盛んではなかった．

例えば，李白は天宝四年（745 年），ともに旅した杜甫を魯郡石門山（現山東省）で送別し詩を贈っている．五言律詩を贈っているところに李白の杜甫に対する一通りではない強い思いが感じられる有名なものである．

魯郡東石門送杜二甫　李白

酔別復幾日　登臨偏地台
何時石門路　重有金樽開
秋波落泗水　海色明徂徠
飛蓬各自遠　且尽手中杯

これに答える杜甫も後年，五言律詩を作っている．

春日憶李白　杜甫

白也詩無敵　飄然思不群
清新庾開府　俊逸鮑参軍
渭北春天樹　江東日暮雲
何時一樽酒　重与細論文

ここでは，見てわかるように，李白の用いた韻目灰に対して、和韻せず，文の韻字を使って答えている．盛唐の詩人の間では和韻は，それほど一般的ではない．ところが，中唐以降になると和韻が盛んとなる．次は和韻の例を見てみよう．

中国にも日本にも，和韻詩はたくさんあるが，多くは同国人同士のものである．つまり中国人同士，日本人同士の贈答詩がほとんどである．だが次の例は，絶海中津（1336～1405）が入明中，四十一歳の時に，高皇帝（洪武帝　朱元璋）に謁見を許され，詩を献じた時のものである．（朝倉 2003）

応制賦三山　絶海中津

熊野峰前徐福祠
満山薬草雨餘肥
只今海上波濤穏
万里好風須早帰

御製賜和　高皇帝

熊野峯高血色祠
松根琥珀也応肥
当年徐福求仙薬
直到如今更不帰

絶海中津と高皇帝との贈答詩は和韻であり，次韻詩となっている．韻目は支．ちなみに現存する絶海中津の贈答詩のうちおよそ半数が，和韻詩であるという．（朝倉 2003）

III　授業の実際

先にも述べたが，この授業は，古典Ｂの授業で『紫式部日記』を読み贈答歌を理解したあと，同時並行して別科目として行っている現代文Ｂの授業で『山月記』を作詩で，まとめる表現活動として行った．

作詩法は古典Ｂ『紫式部日記』のあとに学んだ『史記』刺客列伝のなかで，学習することにした．刺客列伝荊軻には，易水の場面があり，詩を学ぶことができる（古詩ではあるのだが）．

作詩法の習得にはおよそ２時間をかけた．参考書として「誰でもできる漢詩の作り方」を使用し，送別の部分を詩語表として提示した．

IV　指導・実作・添削の実際

1. 最初の２時間

最初の二時間のうち，一時間のおよそ半分は，韻目の理解（平声・上声・去声・入声），二四不同・二六対・下三連・四字目の孤平・反法・粘法などの理解を促し，そのあと直ちに実作に入った．ただ，今回生徒は初学でもあり，和韻は用いなくてもよいと（もちろんできるならば，用いてもよい）指導した．

実際，作詩を始めると早い生徒では，約一時間で作品を仕上げた者もいたため，二時間目は早くできた生徒の作品をスクリーンに投射し，解説や添削を加え，クラス全体の作詩に役立てるようにした．以下，いくつかの作品を紹介したい．

1）作品例１

図１は，およそ一時間で授業中に作り上げたある理科系生徒の例である．作品を書き出してみる．

（生徒作品）

残月哀哀離別悲
一時怪異十分奇
非情運命無常定
揮涙暁天贈此辞

残月哀哀離別悲し
一時の怪異十分奇なり
非情の運命無常の定
涙を揮ひて暁天此の辞を贈る

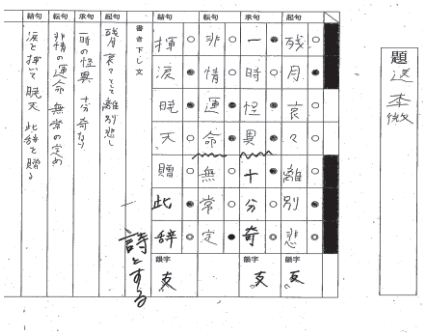

図１　早く書き上げることのできた生徒例

韻目は支であり，悲・奇・辞と押印できている上に，平仄その他も間違いがない．内容についても，山月記の主題やあらすじに沿っており，なかなかの出来といえるのではないだろうか．ただ，結句は「此の辞を贈る」よりは，「此の『詩』を贈る」と「辞」を「詩」と変えたほうがよいと添削した．辞も詩も同じく支の韻であり，辞（ことば）でもよいが詩（此の詩）の方がよいと感じたからだ．

また，この詩の面白いのは，承句・転句が，それぞれ「一時怪異・十分奇」「非情運命・無常定」と句中対のようになっている点である．句中対については，授業中少し触れたが，生徒本人に確かめると，意識して作詩したということである．

2）作品例２

作品例２（図２）は，早く完成したが問題の残るものの例である．

（生徒作品）

故人細話暗涙垂
握別哀哀不勝悲
意気揚揚躍身別
虎成杳渺千里馳

としているが，承句「握別」と転句「躍身別」で，同字重複である．同字重複は実作の機会に例を挙げて説明しなければ生徒には，気づきにくい禁忌である．結句も「虎成」と分かりにくく内容がつかみにくい．これらを指摘したところ，生徒から「虎」に替わる語はないか，という質問を受けたため，「於菟」が使えるのではないかと答えておいた．これらを含めて，生徒が最終的に提出したのが，次の詩である．

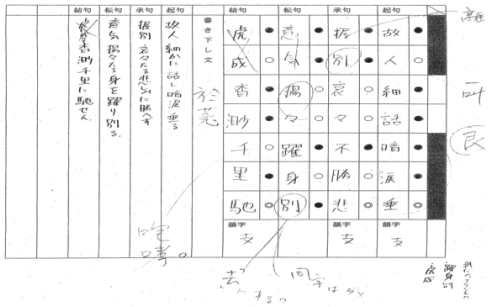

図２　同字重複に結句の意味が不明瞭な生徒例（生徒作品例　推敲後）

故人細話暗涙垂
離別哀哀不勝悲
一叫咆哮躍身去
於菟杳渺千里馳

故人の細話　暗涙垂る
離別　哀哀として　悲しみに勝へず
一叫　咆哮して　身を躍らせて去り
於菟　杳渺として　千里に馳す

ここで，注目したいのは，この生徒に限らず，問題があった部分を指摘すると，指摘された生徒は推敲する際に，「山月記」の本文自体に，よりふさわしい表現や語彙を求める傾向があることである．

転句は初め「意気揚々躍身別」であったものが，「一叫咆哮躍身去」と推敲されている．これは一

見して「山月記」本文の表現や語彙を参考にしていることに気づかされる．作詩を通して，より深く原作の作者の表現の特徴や工夫を読み取ろうとしていることがわかる．

3）作品例３

作品例３は，和韻を行った生徒の例である．結局，和韻を行った生徒は 10 名であり，すべて依韻であった（図３）．

図３　和韻の例
（生徒作品例　推敲後の完成作）

旅途長遠越山高
明月残朝旧友遭
楽話短如風瞬去
時流無遡虎只号

旅途長遠　越山高し
明月朝に残り　旧友遭う
楽話短きこと風のごとく瞬き去り
時流遡る無く虎只だ号するのみ

Ⅴ　生徒作品からわかること

最終的に一名を除いて，108 名の生徒が作品を提出することができた（二つ以上作った生徒もいたため計 122 作）．生徒作品を見た結果，気づいたことをいくつか述べてゆきたい．

まずは，韻目である．韻目は全部で８つの韻目が使われていた．具体的には，表２のとおりである．圧倒的に寒の韻目が多く，真・陽・支と続いた．また，配布した「だれにもできる漢詩の作り方」には記載されていない魚・侵，および仄声の屑　で作詩したものも少数いた．これらの生徒は「平仄辞典」を使って作詩したものである（本校の生徒は生徒一人に一冊の「平仄辞典」が図書館に確保されている）．韻は詩語表を与えて，5 つ提示できれば十分であるという感想を得た．

表２　使用された韻目の結果（数字%）

真	陽	支	豪	寒	魚	侵
23	20	20	8	37	0.8	0.8
○	○	○	○	○	×	×

注：仄声の屑は表から割愛している．
　　×は詩語表にない韻目である．

次に先にも述べたが，生徒が推敲する際，明らかに「山月記」中の表現や語彙が使用されることが多いことあげられる．下に例で（図４）で示したように「山月記」の中の表現や語彙が使われた例は 24 首確認できた．自分の詩の表現を考え，語の選択に迷うとき，生徒は「山月記」の表現に戻ってきている．今回の漢詩の創作は，袁傪から李徴への答詩という形をとっているが，それは一種の「山月記」の続きを書くことでもある．続きというテキストの空白を埋めようとするとき，当然ながら作者の創作意図や表現の工夫を作者の立場に立って，自分なりに深く読み取らなくてはならない．それは，「山月記」を「読む」ということに他ならない．

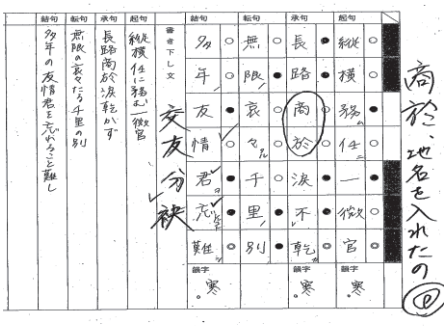

図４　「山月記」の表現「商於」の使用された例

今回の場合も漢詩という媒体に自分の読みを投

影するためには，より深く元のテキストである「山月記」を読み込まなくてはいけなかったのではないだろうか.

Ⅵ　おわりに

結局，詩の提出まで，数回，添削を行なったため，平仄の誤りは 14 名であった．これは意外に少ないと感じたが，作詩の際に配布した用紙に，漢字の平仄の別（○か●か）を記入する欄を設け，清書の際に必ず辞書を引いて平仄の別を確認するよう指導したため，誤りを相当，防ぐことが出来たと考えている．平仄辞典の活用も大多数の生徒の間で行われており，効果的であった.

次に押韻であるが，韻の間違いは５名と極めて少なかった（うち一名は起句の踏み落としのため実質は４名）．従来から指導している経験からも，生徒は平仄よりも押韻には抵抗が少なく，間違いも少ないと言えるように思う.

評価は，①平仄と押韻との形式面で誤りがないか，内容面では，②李徴への送別の気持ちが込められているかの二点で評価した．評価テストでは，詩の鑑賞文を読ませて，平仄の記された漢字を組み合わせることをとおして元の詩を復元する問題を出題し，知識としての詩の規則を，実際に活用することができるかを見た.

生徒の作った詩は，力作が多く，全部を紹介できないことが誠に残念である．今後，機会を見つけて漢詩集にまとめたいと考えているが，その中のある生徒の詩を最後に紹介しておきたい.

獣飢唯呟一寒辞
君詠遺珠才不衰
朋友愛文応落筆
姿為異物猶論詩

獣飢え唯一寒辞を呟くのみ
君は遺珠を詠みて才衰へず
朋友文を愛すれども応に落筆すべし
姿は異物と為るも猶ほ詩を論ぜん

この詩が言うように，実践は終わったが，生徒たちの作品は残ることであるし，結句に謂うように，今後とも，生徒たちが変わっても李徴と袁傪とのように，あるいは，李白と杜甫とのように，教室で「やはり詩を論じていきたい」ものである．将に，重ねて与に細かに詩を論ぜん,である.

謝　辞

この実践を行うにあたり，多くの方のお世話になった．厚くこの場を借りて，お礼申し上げる．本文中でも取り上げたが，朝倉和氏のご論考からは，多大のご示唆とご教示とを得た.

また，普段から日本論語教育学会おいて御指導をしていただいている，大阪大学 加地伸行名誉教授には，作詩指導の際の方法やアイデアについて非常に有益な，お教えをいただいた．この場を借りてお礼を申し上げたい.

文　献

中野幸一　1994.「新編日本古典文学全集 26 『紫式部日記』」小学館.
石川忠久 2005.「漢詩への招待」163-166.文芸春秋.
浜本純逸・松崎正治編　1982.「作品別文学教育実践史事典」190-196．明治図書
太刀掛呂山　1990.「だれにもできる漢詩の作り方」117‐119．呂山詩書刊行会.
岡本利昭　2017.「中学校・高等学校　漢文の学習指導（ことばの授業づくりハンドブック）」（共著）195‐212．渓水社

朝倉和 2003．五山文学における「和韻」について．『国文学攷』広島大学国語国文学会
岡本利昭 2017．5「漱石『自画に題す』を使った『韻塞ぎ』」．大修館『漢文教室』203 号 13‐15
岡本利昭 2017．5「中等教育段階での漢詩指導」全国漢文教育学会『新しい漢字漢文教育』64 号 47‐53